

発 達 1 (201~207)

座長 田島信元・古澤頼雄

- 201 母子関係の成立過程と乳幼児のパーソナリティ
発達(9)(その1)乳幼児期から学童中期にいた
る母子のそれぞれの行動の時差的関連について
北海道教育大学 臼井 博
- 202 母子関係の成立過程と乳幼児のパーソナリティ
発達(9)(その2)乳幼児期から学童中期にいた
る母子関係の時差的関連について
北海道大学 田島信元
- 203 発達初期における母子交互性に関する研究 VII
-1 新生児の個体的特徴について
お茶の水女子大学 藤崎 真知代
- 204 発達初期における母子交互性に関する研究 VII
-2 1・3ヶ月時における母子行動の比較
東京大学 薄田 芳正
- 205 発達初期における母子交互性に関する研究 VII
-3 新生児の個体的特徴と母子関係
日本女子大学 古澤 頼雄
- 206 発達初期における母子交互性に関する研究
VIII 感覚運動的反応の発達
日本女子大学 福本 俊
- 207 発達初期における母子交互性に関する研究 IX
社会的反応の発達
東京学芸大学 高橋 道子

まず、201の発表については、古澤(日本女子大)から就学前期の子どもの行動特徴に stability がみられるというが、どうしておこると思うかという質問があったが、発表者からは、少なくとも生理的な水準の行動(気分良好、神経症的傾向など)や活動性(多動、接近傾向など)は、比較的環境の影響を受けにくいと考えられ、そのことが一定の母子関係(特に母親の子に対する働きかけ方)の型をきめ、子の行動の stable な側面に影響する一要因ではないかという答があった。また、201・202に対し、臼井(聖心女子大)から縦断的研究に於けるサンプリングの方法として、乳幼児期を0~2歳、幼児期(就学前期)を2~5歳として2歳を両者でオーバーラップさせて研究を進める必要があること、即ち、2歳児の重要性について提案があった。その他、福本(日本女子大)らから乳幼児期(0~2歳)の評定の手続についての質問やメジャーの粗さに

ついて指摘があったが、評定の方法は家庭訪問時に3件法で行ったこと、メジャーの粗さについては今後新たな縦断研究で詳しいものを考えていく旨の答がなされた。

203の発表については、若葉(東京学芸大)より乳児の反応が音刺激の高圧レベルによって左右されると考えられるので、それがコントロールされているか質問された。発表者からは、施行法についてはほぼコントロールされているものの高圧レベルそのものはとくに客観的に一定していないと答えられた。

204の発表については、末田(信愛女子短大)より行動観察カテゴリーが何を参考にして作成されたかが、また、川上(慶応大)からは、午前と午後とでは観察結果に差がみられているかが質問された。これに対して、発表者より前者については、Rheingold(1960)、Caudille Weinstein(1969)などを参考に行っていること、後者については、今回は午後の資料のみを用いている旨答えられた。

205の発表については、田島(北大)より母親の新生児についての評定の方が母子関係の機能について予測性が高いと考えてよいかとの質問に発表者からは、予見とは違って、母親のとらえた子ども像の意味が初期においては大きいと言ってよとの説明がなされた。

206の発表については、若葉から物理的高刺激よりも母親の発声の後により多くの乳児の発声が見られることが指摘され、伊志嶺(武蔵女子大)からは、生理的条件の影響について質問されたが、コントロールというところまでは行っていないと答えられた。

最後の207の発表については、井上(愛知県コロニー研究所)から、ビデオ映像による分析と直接観察との差異そのほかについて質問がなされたのに対し、直接観察では不可能な判定が反復検討することによってなされ、その過程において注視行動なども判断が可能となっているとの答がなされた。また、須田(都立大)からは、交互作用にみられた個人差、他の資料との関連だけについて尋ねられたが、このことについては今後各々の資料の整備を待って実行していく旨答があった。また、田島から交互性の開始、終了の基準については、行動の対応以外に文脈を考慮して単位を決める必要性について示唆が出された。

(田島信元・古澤頼雄)